

<p>1 学校教育目標</p> <p>地域のよさをいかし、夢をもち、元気あふれる学校づくり</p> <p>◇ かしく(知) : 確かな学力・知恵を磨く ◇ やさしく(徳) : やさしい心・人と関わる力を培う ◇ たくましく(体) : 強い体・がまんする力を育む</p>	<p>2 本年度の重点目標</p> <p>○基礎・基本の学力の向上 ○学ぶ意欲と思考力・判断力・表現力の育成 ○望ましい学習習慣と学習態度の育成 ○人と協調し、人を思いやる心の育成 ○自らを律する心の育成 ○人と関わる力の育成 ○望ましい健康生活の習慣化、学校体育の推進 ○食育の推進と性教育の実施 ○特別支援教育の推進 ○教育相談の充実</p>
---	--

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

3 目標・評価							
① 確かな学力・知恵を磨く							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	基礎・基本の学力の向上	基礎・基本の学力の向上	・「授業内容がよく分かる」と思う児童を前年度より増やす。 ・学期末に実施する漢字・計算フェスタでの合格者を90%以上にする。 ・CRTや学習状況調査の結果を前年度より向上させる。	・学校教育活動全般において、児童が自分の考えや感想を述べる時間を設定する。 ・漢字・計算フェスタに向け目標を設定して取り組ませ、主体的な学習態度を向上させる。 ・学年の実態に応じ、計画的に級外等を配置し、知識の定着を図る。	B	・児童アンケートで「授業がわかりやすい」と答えた児童は88%で、昨年度から6ポイント低下した。一方、県学習状況調査やCRTでは全体として昨年度を上回り、漢字計算フェスタの合格率も90%を上回った。 ・漢字や計算の基本的な内容は十分定着しているが、思考力・判断力・表現力においては課題がある。	・思考力・判断力・表現力を育成するために、交流活動と書く活動を授業の中に位置づける。 ・漢字・計算フェスタは継続し、基本的な内容の定着を図る。 ・単元や児童の実態に応じ少人数指導を実施し、授業改善に努める。
			・学習用具等を忘れずに準備できる児童を90%以上にする。 ・家庭学習を忘れずにできる児童を90%以上にする。 ・話がしっかり聞ける児童を90%以上にする。	・家庭でも片付け、準備の習慣化を図るため、学校便りや学級より等で家庭に協力を働き掛ける。 ・「家庭学習パワーアップ週間」を毎月設定し、家庭と協力して進める。 ・話の聞き方の約束を決めて、全校で共通理解して取り組む。	B	・学習用具に関する児童アンケートでは、「できている」の回答率が87%で目標を下回ったが、家庭学習と話を聞くことについては90%を上回った。このことから、学習習慣や態度が定着してきているといえる。 ・児童が授業中に進んで発表できるようにしていくことが課題である。	・年度当初に「学習の約束」を確認し、共通理解のもとよりよい学習習慣の育成に努める。 ・高学年は授業中の発表が増えるよう、支持的風土作りに努める。 ・家庭学習の充実を図るために、重点項目を決めて「家庭学習パワーアップ週間」を継続する。
			・各教科の単元テストにおいて、学級平均が期待得点を超えるようにする。 ・年度末での到達度テストで80%以上の得点率となるようにする。	・進捗計画や、到達度について各教科で再点検を行い、教材開発を行う。 ・算数については、TTや少人数授業を学習内容や児童の実態に応じて実施する。 ・わかる授業作りに向けて、教材研究や教材の準備等を、学級担任とTT担当者が共同で行う。	B	・全学年の算数の単元テストの年間平均は80点を上回り、期待得点を超えることができた。 ・4・5年生で、後半の単元で多く少人数授業を行うことができた。 ・学年が上になるにつれ、発表に苦手意識を持つ子が多くなり、発表や話し合いが低調であった。	・発表に対する抵抗が減るような手立てを講じる。具体的には、話し合い活動を活用して意見交流の中で自信をつけさせたり、みんなの意見をまとめて発表させたりする。 ・TTや少人数指導を一部の保護者は「あまり知らない」と答えていたので、次年度はTT便りなどの発行をして啓発を行う。
	○ICT利活用教育の充実	ICTを利活用した「わかる授業」づくり	・ICTを活用した授業を全職員が実施する。 ・夏休期中にICT利活用に関する職員研修を実施し、ICTの授業への活用スキルを高める。 ・デジタルとアナログ双方の利点を生かし、児童が学びやすい活用方法について研修等を行う。	・全ての職員が、電子黒板等のICT機器を活用した授業を行った。また、夏休期中に全職員を対象にプログラミング教育についての研修を行い、本活動のねらいと方法について研修を深めることができた。 ・デジタルとアナログ双方の長所と短所を示し、状況によって使い分ける際のポイントを紹介することができた。	B	・プログラミング教育については、未実施の学年や教科があるため、年度当初に実施学年や教科の共通理解を図る必要がある。 ・タブレットPCの特性を生かした授業が少ないため、本校の機材で可能なことを整理し、その長所を生かした授業や教材を考えていく必要がある。	
	○図書館教育	読書指導の推進と読書の習慣化	・朝の読書タイムの充実を図る。 ・学級での読書活動を促進し、授業での活用をすすめる。 ・毎月の「家読デー」で、家庭での読書推進を図る。また「読書の記録」を活用する。	・10分間の読書タイムに加え、ボランティアによる読み語りを実施し、本に親しませる。 ・図書館の環境を工夫し、本への興味関心を高める。 ・調べ学習等での図書館活用を促進し、関連書を増やしていく。 ・「めざせ〇冊カード」「〇冊達成賞」などで読書の意欲づけを図る。 ・家読(うちどく)を奨励し、定期的に図書日より等で保護者に呼びかける。	B	・読書冊数を目に見る形で示すことで、意欲的に読書する児童が多かった。 ・国語や生活科の活動で図書館の本を有効に活用していた。 ・毎月の「家読デー」で家庭での読書推進を定期的に行うことができた。 ・ボランティアによる読み語りや職員によるお話しタイムの感想を「読書の記録」を使って活用することができた。 ・貸出冊数が少ない児童に対して個々の支援が課題である。	・全校児童が毎日図書館へ足を運ぶように、目に見えるような形で示していく。 ・図書館の環境を工夫し、本への興味関心を高める。 ・調べ学習等での図書館活用を促進し、関連書を増やしていく。 ・「めざせ〇冊カード」「〇冊達成賞」などで読書の意欲づけを図る。 ・「読書の記録」を有効に使い、読み取る力をつけていく。
学校運営	○教職員の資質向上	校内研究の充実	・書くことへの意欲をもち、楽しみながら書く児童を育てる。	・作文テスト及びアンケート等で児童の書くことの実態を把握し、指導に生かす。 ・①語彙学習が書くことの学習へと生かされるようにする。②取り立てて指導で明らかになった手立てをもとに、様々な文種で短作文を書く。③②をもとに授業づくりをする。 ・児童の言語環境を整える。	B	・児童の書く力の実態把握や言語環境の整備、「言葉集めを生かした短作文指導計画」をもとにした授業実践を重ねることで、自分なりに言葉を選びながら楽しく書く児童を増やすことができた。 ・書くことを困難に感じている児童への個別の対応が課題である。	・児童が、心から「書きたい」と思えるような教材の開発をする。 ・国語科の全領域を充実したものにし、児童の言語感覚を磨く。特に、「読むこと」「聞くこと」の学習で、優れた表現と出合わせることや、言葉を駆使して表現する場を工夫していくことを大切にす。
② やさしい心・関わる力を培う							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○重点目標	無言掃除の徹底	・無言掃除に懸命に取り組む児童を90%以上にする。	・毎週月曜日に行う無言掃除集会を通して、無言掃除の意義を考えさせる。 ・教師も児童とともに掃除に取り組み、無言掃除ができている児童を認め、褒める。 ・無言掃除集会や掃除の時間に、掃除の仕方や掃除用具の取り扱い方、後始末の仕方などを順序立てて丁寧に指導する。	A	アンケート結果によると、無言掃除に一生懸命取り組むことができた児童が90%を超えていた。無言掃除集会において、無言掃除の意義を児童に伝えることができ、今後も、無言掃除を北明小学校の伝統にしていきたい。	週1回の無言掃除集会を今後も継続し、児童の忍耐力、勤労意欲、協調性等を育てていく。
	●心の教育	人権・同和教育の充実	・「気になる子」を中心に据えた「一人一レポート」に全職員が取り組む。	・PTAを対象とした「人権・同和教育」の講演会を実施する。 ・12月に人権集会を実施する。 ・人権について考える詞がある歌を人権集会の時に歌う。クラスでも練習してもらい、人権について考えを深める。	B	人権集会の取り組みや学級での人権学習により、人権意識の高まりは、一定の成果が上がってきた。また、「一人一レポート」に取り組むことで、児童一人一人への見取りができていく。 ・日常の子どものコミュニケーションの仕方に関する指導が課題である。	「一人一レポート」を書くことで、学級の課題への取り組みが焦点化できると思われる。次年度は、QUTテストの結果や毎月のアンケートをきっかけにして、早い時期から取り組む。 ・部落差別学習の年間計画を作成実施できるように努める。
		道徳教育の充実	・「特別の教科 道徳」において、「考え、議論する道徳」を意識した授業づくりができる教員を90%以上にする。	・道徳教育推進教員を中心に、「考え、議論する道徳」の授業づくりに関する職員研修を実施する。 ・「ふれあい道徳」参観において、「考え、議論する道徳」を踏まえた授業を公開する。	C	道徳の評価についての研修を行うことができ、道徳の授業公開もできた。しかし、職員アンケートの結果を見るとほぼ達成とあまり達成されていないが50%ずつで、「考え、議論する道徳」の授業作りがまだ不十分である。	・道徳の授業研究会を実施する等により、「考え、議論する道徳」の授業についての研修の充実を図る。
	○特別活動	子ども主体の児童会活動の充実	・児童の思いを中心に据えた集会活動や委員会活動、縦割り活動を行い、集う喜びを味わわせる。	・年間の見通しを持たせることで、各集会の準備に早めに取り組み、内容を充実させる。 ・児童に企画運営を任せられる機会を多く持つようにする。	A	アンケートの結果によると、縦割り班での活動や児童集会に、楽しく参加することができた児童が95%を超えていた。高学年に企画運営を任せられる機会を多く持たせたことにより、低・中学年も協力する態度が身に付いている。	今後も、年間の見通しをしっかりと持たせて、各集会などの準備に取り組ませる。また、児童の思いを中心に据えた活動となるよう指導・支援を行っている。

③ 強い体・耐える力を育む

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○重点目標	あいさつ・返事の習慣化	・全児童が相手より先に、元氣よく挨拶できるようにする。 ・地域においても元氣よく挨拶ができる児童を育てる。 ・全児童が元氣よく堂々と返事ができるようにする。	・交通指導員さん、北明っ子見守り隊の人、家族や地域の人に挨拶をすることや、道路を横断した後には止まってもらった車に「ありがとう」と言うことを、全校に指導する。 ・全校朝会、集会、地区児童会、授業中など常時継続して挨拶や返事について声をかけ奨励していく。 ・児童の自主的活動として、高学年や委員会を中心として、あいさつ運動を行う。 ・挨拶や返事が素晴らしかった児童を随時紹介し、意欲を高める。	B	全校朝会や地区別下校時に挨拶についての意義を話したり、上手な児童を称賛する機会を設けたことで児童の挨拶に対する意識の向上を図ることができた。また、挨拶ボランティアも募集し、全校朝会で称賛し続けたことで、立ち止まって挨拶や会釈をする児童が増えてきた。しかし、校外での挨拶は改善すべきところがある。	元氣が無かったり、顔を上げずに挨拶をする児童がまだいる状況であるので、あいさつボランティアなどの取り組みは継続していく。また、校外での挨拶については、PTAや保護者を巻き込んだ取り組みを考えていく必要がある。道徳等の授業実践における意識改革も継続する必要がある。
	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムが整った児童を90%以上にする。 ・歯の健康に興味を持たせ、丁寧な歯磨きをする習慣の定着を目指す。	・集会や放送等での保健指導や保健だよりを利用して、「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムを意識するよう呼びかける。 ・保健室来室者やすこやかチェックで生活習慣が乱れてると把握できた者に対して、個別指導を行い、規則正しい生活の大切さを伝える。 ・給食後の歯磨きの様子を見て、個別指導を行う。 ・学校歯科医等によるブラッシング指導を計画し、丁寧な歯磨きの仕方を学ぶ機会を作る。	B	・児童アンケートで「早寝・早起き・朝ごはん」ができていると回答した児童は85%であったが、毎週実施している「すこやかチェック」では、早寝ができている児童は90%以上であった。 ・歯科保健活動として、「しあげ磨きの日」の取り組みを行ったことにより、歯の健康に対する意識が高まった。 ・児童の行う自己チェックを、保健指導に効果的に活用していくことが課題である。	・心のアンケートと一緒に月に1回、個別の生活習慣チェックを行い、児童の実態も踏まえて保健指導を行う。 ・頭痛や倦怠感の児童が多発しないように、規則正しい生活習慣の大切さを、集会や保健だより、個別指導等で伝える。 ・しあげ磨きとは別の歯科保健活動を実施する。学校歯科医等によるブラッシング指導は次年度も実施する。
		運動習慣の改善や定着化	・休み時間に運動場で遊ぶ児童を90%以上にする。 ・体カテストで県平均を上回る。	・運動委員会企画による遊びの大会や縦割り遊びなどを実施し、屋外で遊ぶ機会を増やす。 ・体育の時間に体ほぐし運動や体づくり運動を計画的に取り入れ、運動が好きな児童を増やすとともに、体力、運動能力の向上を図る。	B	・児童アンケートで「休み時間外で遊んでいる」と回答した児童は86%で、目標を下回った。一方、体カテストでは、一部を除き、県平均値を上回った。 ・体育の指導方法や教具などの情報の共有化と、委員会活動を中心とした外遊びの奨励が課題である。	・運動委員会による遊びのイベントを、計画的に実施(2学期を重点的に)する。 ・ワークシートや教具を、体育主任が一括管理し、学級担任に情報提供を行う。
	○教育相談	教育相談体制の構築	・児童の困り感を早期発見し、迅速に対応できる職員の体制を整える。	・毎日の児童観察や会話を通して、児童の些細な変化に素早く気づくことができるようにする。 ・対応が難しい児童については、SCの助言を踏まえ、担任と連携した対応を行う。 ・月に1回心のアンケートを実施し、実態把握を行うとともに、困り感を訴える児童に対しては、早期に話を聞き、対応をする。 ・10月に教育相談週間を設け、担任と児童が信頼関係を構築できる機会を作る。	B	・月に1回心のアンケートや教育相談週間の実施により、児童の実態把握、及び早期対応ができた。 ・手厚い対応が必要な児童については、ケース会議を開き、具体的対応法について協議ができた。 ・SCによるグループエンカウンターの実施等、SCの活用工夫が課題である。	・月に1回心のアンケート、10月の教育相談週間には続けて行う。また、心のアンケートは、担任だけでなく、管理職や関係職員にも見てもらい、実態把握を行う。 ・SCの紹介を1学期の初めごろに行い、児童にSCの紹介をしたり、月に1回教育相談だよりを作成し、カウンセリングを利用しやすい環境を作る。
	●いじめ問題への対応	いじめの未然防止と早期発見	・いじめや不登校の根絶を目指して、温かい人間関係を構築し、児童一人一人がお互いの個性を認め伸張し合う学級経営や道徳教育を充実させる。 ・問題行動の早期発見、迅速な対応を目指す。	・Q-Uを年2回実施するとともに、長期休業中に「よりよい学級集団づくり」の研修を行う。 ・心のアンケートを毎月実施し、10月の教育相談週間には、すべての児童と個人面談を実施する。 ・いじめ・不登校未然防止のためにチェックリスト等を活用する。 ・管理職、生徒指導主任への報告、連絡、相談を密にし、問題行動への初期対応を充実する。 ・週一回の職員連絡会で生徒指導について全職員で情報交換を行い一人ひとりで抱え込まない体制をとる。 ・心のポストを設置し、投函について毎日確認し、いじめの早期発見、早期対応に努める。	B	・心のアンケートやQ-Uテスト等の取り組みについては、計画通りに実施・分析し、研修会なども開き、学級経営や個々の児童の指導に生かすことができた。また、職員連絡会や管理職への相談などを随時実施することで、全職員で共通理解・解決に向かうことができた。 ・未然防止という点では、心のポストやアンケートを通してから知るということが多かったため、一人一人の職員がさらに意識を高く持ち、子ども達と接する必要がある。	・子どもの訴えを受けてからの対応はできていたが、未然防止という観点からはまだ改善する部分もあるので、研修会などを開き、さらに子供の様子を見とるスキルを身に付けていく必要がある。
	○特別支援教育	特別な支援を要する児童への学校全体による支援体制の充実	・学級担任だけでなく、学校全体として支援を行える体制を構築する。 ・児童一人一人の実態に応じた適切な指導・支援を行う。 ・教育相談と協力して指導・支援を進める。	・個別の指導計画及び教育支援計画作成に当たって、通常の学級担任と特別支援学級担任とが協力して取り組む。 ・個別の指導計画作成対象の児童については、職員間で定期的に情報共有を行う。 ・問題行動の未然防止の観点から、気になる行動が見られる児童について早期にケース会議を実施する。	B	・保護者アンケートでは、95%が「個別の支援が適切にできている」と回答している。また、個別の支援・指導計画作成に当たって、特別支援学級担任が助言を行う体制を整えることができた。 ・個別の支援・指導計画に記した支援内容についての職員間での情報共有が課題である。	・年に数回、時間を確保して、必要な児童に関する指導・支援内容に関する職員間の共通理解を図る。 ・ケース会議を実施するに当たって、ニーズの把握からケース会議後の対応までの流れを明確化する。
学校運営	○安全対策	危機管理体制の充実	・非常変災時等における、「保護者への送迎要請」及び「児童の一時待機」の手順について、保護者へ周知する。	・「保護者への送迎要請」及び「児童の一時待機」の流れを6月上旬までに明文化し、保護者へ配布する。 ・危機管理マニュアルに、「保護者への送迎要請」及び「児童の一時待機」の手順を明記する。	B	・保護者アンケートでは、安全対策に向けての指導ができているとの回答率が93.8%であった。また、「保護者への送迎要請」及び「児童の一時待機」の流れを保護者へ配布し、周知を行うことができた。 ・危機管理マニュアルが形骸化しており、職員の危機管理意識を高めることが課題である。	・不審者侵入、児童の校内における事故等、危機場面を想定した職員の対応訓練を実施し、危機管理意識を高める。 ・保護者の、学校からの緊急メールの受信状況を確認した上で、児童引き渡し訓練を実施する。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目(あれば記入)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○地域との連携強化	コミュニティスクールの充実	・運営協議会の委員だけでなく、老人会、民生委員、公民館、婦人会等、校区内の各団体との連携を強化する。	・必要に応じて、校区内の各団体の会合に管理職が出向き、学校行事等への協力を具体的に依頼する。 ・地域の方々に協力をいただいた取り組みを、学校HPや学校便り、コミュニティスクール便り等により、積極的に情報発信を行う。	A	・管理職が公民館長や老人会長会に出向き、学校行事への協力要請を行ったことで、昨年度以上の秋祭りへの協力や教育講演会への参加が得られた。 ・今後も、地域の方や保護者が気軽に学校の教育活動に協力できる体制を更に整備していくことが課題である。	・学校運営協議会を、体験活動に関する内容だけでなく、学校教育全般について協議する場にする必要がある。 ・コミュニティスクールの活動へのPTAの関わりを深める。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	業務効率化の推進	・昨年度の平均超過勤務時間31時間13分(1ヶ月平均)を下回る。	・職員間の連絡にはデジタル掲示板を活用する等により、会議の精選及び時間短縮を図る。 ・金曜日を定時退勤推進日とし、18:00施錠を徹底する。 ・タイムカードで職員一人一人の勤務時間を把握し、1ヶ月の超過勤務時間が長い職員には、管理職が個別に声かけを行う。	B	・1月末現在の1ヶ月当たりの平均超過勤務時間は30時間45分で、昨年度を下回った。また、職員アンケートでも、全ての職員が、業務の効率化に組織的に取り組んでいると回答している。 ・職員一人一人に目を向けると、超過勤務時間の個人差が大きく、職員の業務分担の見直しと更なる業務の効率化が課題である。	・校務分掌(プロジェクト)の見直しを行い、職員の業務量の平準化を図る。 ・行事の見直しや会議の縮減、校務におけるICTの活用を進め、業務効率化の更なる推進に取り組む。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目